

## 大学教育における基礎ゼミが看護学生の学習意欲、学習成果及び自己教育力に及ぼす影響

道廣 睦子<sup>1)\*</sup>, 瀬戸口要子<sup>1)</sup>, 掛川 静代<sup>2)</sup>, 明石 智子<sup>2)</sup>,  
瀧本 茂子<sup>2)</sup>, 小島 賢子<sup>2)</sup>, 幸島 美絵<sup>2)</sup>, 中桐佐智子<sup>3)</sup>

大阪青山大学健康科学部看護学科開設準備室<sup>1)</sup>, 兵庫大学健康科学部看護学科<sup>2)</sup>,  
近大姫路大学教育学部こども未来学科<sup>3)</sup>

Effects of the basic seminar course on college students motivation to study, assessment of study progress, and skills for self-education

Mutsuko MICHIIHIRO<sup>1)</sup>, Yoko SETOGUCHI<sup>1)</sup>, Shizuyo KAKEGAWA<sup>2)</sup>, Tomoko AKASHI<sup>2)</sup>,  
Shigeko TAKIMOTO<sup>2)</sup>, Satoko KOJIMA<sup>2)</sup>, Yoshie KOUJIMA<sup>2)</sup>, Sachiko NAKAGIRI<sup>3)</sup>.

Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University<sup>1)</sup>

Department of Nursing, School of Health Science, Hyogo University<sup>2)</sup>

Department of Child and Education, Faculty of Pedagogy, University of Kindaihimeji<sup>3)</sup>

**Summary** The present study involving nursing college students was conducted to empirically examine effects of the introductory college course on seminars called “Kiso Zemi (meaning basic seminars)” on the students’ motivation to study, assessment of academic progress, and skills for self-education. The subjects were 361 nursing students of College B in Prefecture A, where a questionnaire survey was conducted to ask them their evaluation of the course as to its effects on their motivation to study, assessment of academic achievements, and skills for self-education. They positively evaluated the course as to the skills for presentation, group work, literature search, and report writing. Although the course did not directly influence the skills for self-education, it favorably contributed to their motivation to study and assessment of academic achievements, which in turn should influence their skills for self-education. Since the class style may influence their approaches to learning and assessment of academic achievements, teachers should make efforts to improve their class teaching methods.

**Keywords:** basic seminars, nursing students, self-education ability, motivation to study, assessment of academic progress

看護学生、基礎ゼミ、学習意欲、学習成果、自己教育力、

### はじめに

わが国では少子高齢化が進行し、高度医療や在宅医療の進展などに伴い保健・医療・福祉を取り巻く情勢が変化するとともに国民のニーズが高まり、そのニーズに対応していくために、看護系大学には確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護職者の育成が期待されている<sup>1)</sup>。1994年には、大学基準協会

から「期待される看護専門職像」が提言され、「看護専門職にあるものは、多様にしかも急速に変化しつつある社会情勢を認識し、生涯を通して最新の知識、技術を学習し続ける」とされ、主体性、創造性、積極的な行動能力など自己教育力の育成が重要であることが示唆された<sup>2)</sup>。中央教育審議会の答申「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について（2002）<sup>3)</sup>」では、高等教育における質保証が重要な課題として位置

\*Email: m-michihiro@osaka-aoyama.ac.jp  
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

付けられ、規制改革の流れを踏まえながら、大学設置後の状況を評価できるシステム構築の必要性が述べられ、大学生に授与する学士が保証する能力の内容を学士力として明示され、学習成果の評価が求められている。また、学生の学力・動機面での多様化により大学生活を送るための基礎的知識・技能の習得を目標に、2008年文部科学省中央教育審議会答申では初年次教育について「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と定義されている<sup>4)</sup>。

B大学の健康科学部看護学科では平成22年より基礎ゼミを導入した。基礎ゼミの目的は、高校までの「受動的な勉強」から、大学での「能動的な学び」へと、学習スタイルの転換をめざすことにある。内容として学習スキル（レポートの書き方、文献検索の方法、グループワークの方法、プレゼンテーションの方法、ノートテイキング）の習得や、望ましい学習態度や動機づけの獲得、学生生活リズムの構築などを目的とし教育が進められている。順調に教育が進められれば、看護学生の自己教育力は高まり、大学に対する満足度も高まることが予想できる。

大学の環境に対する満足度については、大学内の友人関係<sup>5)</sup> 将来の職につながる授業やカリキュラム、進路相談を行っている学生支援体制<sup>6)</sup> などが大学生活への満足度につながるとしている。また、道廣ら<sup>7)</sup> は、看護系大学における大学生活への満足度について、大学が学生に良い学習環境を与えることによって学生の学習意欲が変化し自己教育力を上げることにつながることを明らかにしている。また、学生が望んでいる学習環境とは、専門的な知識と技術が学べ、積極的に参加したい授業があり、実践的授業を望んでいることを明らかにし、大学の質の保証が求められるとしている<sup>2)</sup>。学習意欲についての調査は、岡田<sup>8-9)</sup> が一般学生の学習への取り組みについて報告している。i 学習意欲の高い学生は学習への取り組みが勤勉で計画的に取り組む姿勢が高い、ii 学習への無気力な学生は取り組みが低い、iii 大学の学習に価値を認め自律的に学習できている学生は学習成果を得られている、との報告があった。看護学生は目的意識が明瞭であり学習意欲も高いことが予測できる。

そこで、看護学生の基礎ゼミの評価と学習意欲、学習成果が自己教育力にどのような影響を与えているのか明らかにしたいと考えた。これらの目的を明らかにすることで学生にどのような学習機会を与え、学生はその

学習機会に対しどのように取り組んでいるかという側面が明らかになり大学教育の質の保証に貢献できる。

## 研究目的

本研究では、看護学生の基礎ゼミの評価と学習意欲と学習成果が自己教育力にどのような影響を与えているのか明らかにしたい。これらの目的を明らかにすることで学生にどのような学習機会を与え、学生はその学習機会に対しどのように取り組んでいるかという側面が明確になり大学教育の質の保証に貢献できる。

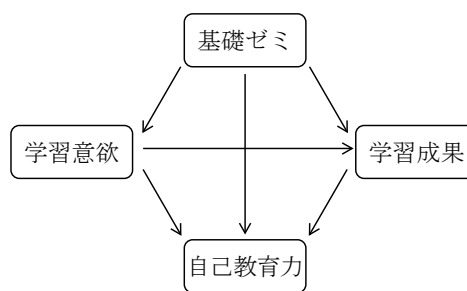


図1 研究の枠組み

## 研究方法

1. 調査対象：A県B大学の看護学生361名。
2. 調査期間：2012年11月～2013年1月
3. 調査方法：授業終了後、無記名自記式アンケート用紙を配布し、教室内に回収箱を設置し2週間後に回収した。
4. 調査内容：<別紙として調査票を添付>
  - 1) 対象者の基本的属性として性、年齢、社会経験の有無、部活動・サークル活動の有無、アルバイトの有無、住居形態を質問した。
  - 2) 基礎ゼミは、「1年生1期に開講された基礎ゼミは、あなたの学習に役立ちましたか」と設問し、シラバスに沿った項目「基礎ゼミで学んだノートテイキングを活かしている」「基礎ゼミで学んだプレゼンテーションの方法がわかり活かしている」等質問した。回答は「非常にそう思う4点～まったく思わない1点」の4件法で求めた。得点が高いほど基礎ゼミが役に立っていることを表している。
  - 3) 「学習意欲尺度」については、学習への取り組み姿勢を捉えるため、Benesse 教育研究開発センター（2008）の大学生の学修・生活実態調査より、学生の学習に対する姿勢や態度を参考

に作成された岡田<sup>8,9)</sup>の「学習への取り組み尺度」を用いた。この尺度は「授業に必要な教科書・資料、ノートなどを毎日持参する」「授業で出された宿題や課題をきちんとする」「グループワークやディスカッションで自分の意見をいう」「計画を立てて勉強する」等学習への取り組み態度について質問したもので学習意欲を測定する尺度であり、「1点全くあてはまらない～4点とてもあてはまる」の4件法で求めた。得点が高いほど学習への取り組みが高い。

- 4) 大学生学習成果尺度は、岡田<sup>8,9)</sup>の学生の成長感に関する尺度を用いた。この尺度は岡田が Benesse 教育研究開発センター (2008) の調査の学生の成長感に関する項目を一部修正し用いた 24 項目のうち、信頼性・妥当性の検証された 15 項目を用いた。「現状を分析し、問題や課題を明らかにする」「物事を批判的・多面的に考える」などの批判的思考や「外国語で聞き、話す」などの「外国語運用能力」や「国際的視野」「社会関係形成」についての尺度であり、「4点：かなり身についた」「3点：少し身についた」「2点：あまり身につかなかった」「1点：まったく身につかなかった」の4件法で求めた。得点が高いほど学習成果が高いことを表している。
- 5) 自己教育力は、西村<sup>10)</sup>らが作成した自己教育力測定尺度の40項目を使用。各項目に対する回答は、「4点：そう思う」「3点：ややそう思う」「2点：あまり思わない」「1点：思わない」の4段階評定で求めた。従って得点が高いほど自己教育力が高いことを示すよう設定した。なお項目の8・9・10・18・19・20・30・37・38・39・40は反転項目であるため、得点化を反転させて行った。なお、西村の自己教育力尺度は、内的妥当性、信頼性および看護職アイデンティティとの併存的妥当性が検証されている<sup>10)</sup>。

### 5. 分析方法

基礎ゼミ、自己教育力、学習意欲、学習成果に対して探索的因子分析とクロンバックの $\alpha$ 信頼性係数を求めた。次いで、学習成果に対しては確認的因子分析を行った。その後、基礎ゼミ・学習意欲・学習成果と自己教育力について Pearson の相関係数を求めた。また、学生の自己教育力に影響を及ぼす要因分析には、自己教育力を従属変数とする重回帰分析を行った。変数の投入は強制投入法を用いた。以上の統計には、統計プログラムパッケージ SPSS Version19 for Windows 並びに構造方程式モ

デリングソフト Amos Version19 を用いた。

### 6. 倫理的配慮

B大学の倫理審査委員会の承認を得た。本研究は教員が実施し、対象者は学生であることから、研究参加に同意を得るため、調査を依頼する際、研究の主旨と内容について説明し、研究への参加は自由意志であり、任意に基づくものであることを明記した。また、調査は無記名で個人特定はしないこと、調査協力の有無や回答内容については学業成績とは関係しないことを説明した。

## 研究結果

### 1. 学生の背景 (表1)

361名に調査票を配布し、調査項目に欠損値のない297名のデータを分析対象とした(有効回答率82.3%)。回答者の平均年齢は20.1歳(標準偏差2.26、範囲18~43)であった。学年は1年生107名(36.0%)、2年生94名(31.6%)、3年生66名(22.2%)、4年生30名(10.1%)であった。性別は、女255名(85.9%)、男42名(14.1%)であった。アルバイト経験有り213名(71.7%)、無し84名(28.3%)、住居形態は家族と同居221名(74.4%)、大学寮19名(6.4%)、一人暮らし54名(18.2%)、その他3名(1.0%)であった。

表1 学生背景

項目	名 (%)
学年	
1年生	107(36.0)
2年生	94(31.6)
3年生	66(22.2)
4年生	30(10.1)
性別	
女	255(85.9)
男	42(14.1)
部活動	
している	149(50.2)
していない	148(49.8)
アルバイト経験	
有	213(71.7)
無	84(28.3)
住居形態	
家族同居	221(74.4)
大学寮	19(6.4)
一人暮らし	54(18.2)
その他	3(1.0)
社会人経験	
有	28(9.4)
無	269(90.6)

表2 基礎ゼミの探索的因子分析の結果

項目	平均値	SD	第1因子
基礎ゼミでコミュニケーションを学んで役立っている	2.973	0.757	0.805
基礎ゼミで学んだグループワークを活かしている	3.024	0.746	0.779
基礎ゼミで学んだプレゼンテーションの方法がわかり活かしている	3.047	0.701	0.776
基礎ゼミで大学生活(健康管理・心の健康・学習方法)等の学びは役に立っている	3.101	0.699	0.677
基礎ゼミで学んだレポートの書き方を活かしている	2.552	0.821	0.577
基礎ゼミで学んだ文献検索の方法が理解できた	2.989	0.742	0.493

2. 基礎ゼミ (表 2)

探索的因子分析の結果1因子が抽出され、クロンバックα信頼性係数は.863であった。平均値が3以上は、「基礎ゼミで大学生活(健康管理・心の健康・学習方法)などの学びは役立っている」平均値3.101(標準偏差.699)「基礎ゼミで学んだプレゼンテーションの方法がわかり活かしている」平均値3.047(標準偏差.701)、「基礎ゼミで学んだグループワークを活かしている」平均値3.024(標準偏差.746)であった。

3. 学生の学習意欲 (表 3, 図 2)

学習意欲で平均値が高かったのは、「履修中登録した科目は途中で投げ出さない」平均値3.8(標準偏差0.51)、「授業に必要な教科書・資料、ノート等毎日持参する」平均値3.7(標準偏差0.55) 授業で出された宿題や課題はきちんとする。平均値3.6(標準偏差0.56)など

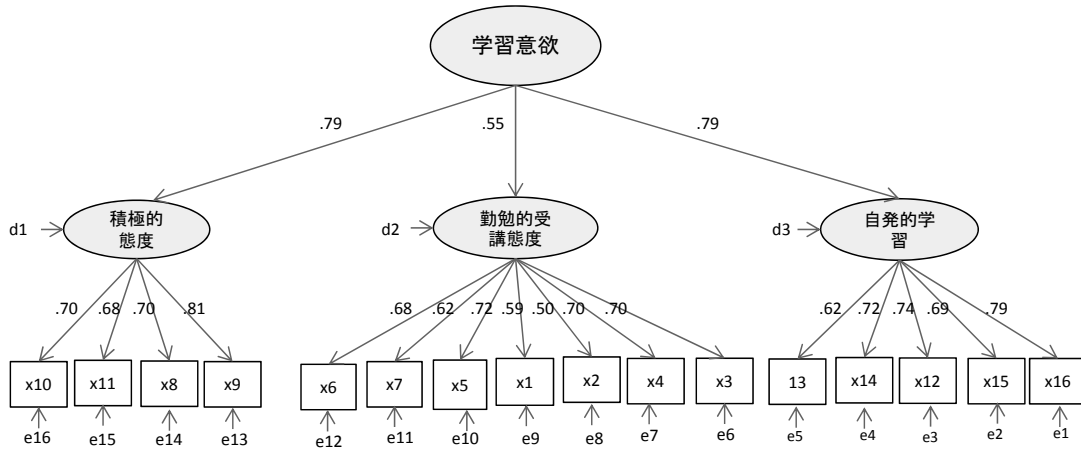
勤勉的態度得点が非常に高く、次いで「授業とは関係なく興味を持ったことは自主的に勉強する」など主体的学習であった。

学習意欲は、第1因子「自分の意志で継続的に勉強する」「計画を立てて勉強する」「授業で興味を持ったことについて主体的に勉強する」などから「自発的学習」と命名、第2因子は「授業で出された宿題・課題をきちんとする」「授業に遅刻しないようにする」「履修登録した科目は途中で投げ出さない」など「勤勉的受講態度」と命名した。第3因子は、「グループワークやディスカッションでは進んでまとめ役をする」「グループワークやディスカッションでは自分の意見を言う」「クラス全員の前で積極的に質問する」は「積極的主張」と命名した。クロンバックα信頼性係数は、全体で.883であった。次いで、本研究では探索的因子分析で得られた因子構造を同データを用いた確認的

表3. 学習意欲の探索的因子分析結果

項目	平均値	SD	抽出された因子		
			第1因子	第2因子	第3因子
第1因子 自発的学習 α信頼性係数 .853					
x16.自分の意志で継続的に勉強する	2.774	.834	.964	.003	-.136
x15.計画を立てて勉強する	2.636	.902	.870	.046	-.119
x12.授業で興味を持ったことについて主体的に勉強する	2.865	.777	.669	-.006	.080
x14.授業で分からないことは、自分で調べる	2.993	.688	.561	.025	.136
x13.授業とは関係なく、興味を持ったことについて自主的に勉強する	2.889	.821	.526	-.050	.135
第2因子 勤勉的受講態度 α信頼性係数 .799					
x3.授業で出された宿題や課題をきちんとする	3.543	.564	.057	.754	-.057
x4.授業に遅刻しないようにする	3.623	.625	-.072	.736	-.009
x2.履修登録した科目は途中で投げ出さない	3.771	.508	-.124	.638	-.073
x1.授業に必要な教科書・資料、ノート等毎日持参する	3.663	.552	-.117	.609	.083
x5.レポートやテストを提出する前に見直す	3.428	.755	.186	.561	.056
x7.授業で配布された資料などを整理する	3.471	.642	.188	.479	.082
x6.できる限りよい成績をとろうとする	3.414	.721	.258	.452	.077
第3因子 積極的主張 α信頼性係数 .804					
x9.グループワークやディスカッションでは進んでまとめ役をする	2.643	.905	.016	-.035	.831
x8.グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	3.253	.721	-.141	.217	.766
x11.グループワークやディスカッションでは、異なる意見の立場に配慮する	2.832	.841	.251	-.059	.514
x10.クラス全員の前で、積極的に質問をする	2.195	.963	.412	-.218	.465
固有値			5.9	2.4	1.2
累積寄与率			33.6	45.6	50.7
因子相関行列					
1. 自発的学習			1.000		
2. 勤勉的受講態度			.386	1.000	
3. 積極的主張			.617	.348	1.000

最尤法 プロマックス回転後の因子パターン行列



n=297,  $\chi^2=284.986$  DF=97 GFI=.889 AGFI=.845 CFI=.908 RMSEA=.081  
 図2. 学習意欲の確証的因子分析(標準化推定値)

因子分析により評価した。この分析では、探索的因子分析の結果、得られた因子を第1因子、「学習意欲」を第2因子として位置付けた二次因子モデルを設定し、各変数間の関連性およびそのモデルのデータに対する適合性<sup>11)</sup>を検討した結果、参考にした適合度指標はいずれも高くこのモデルが妥当であることが示された(カイ2乗値 = 284.986, DF=97, GFI=.889, AGFI=.845, CFI=.908, RMSEA=0.081)。また、モデルに含まれるパスの係数値はいずれも高く、統計的に有意な水準にあった。

#### 4. 学習成果 (表4)

探索的因子分析の結果、第1因子は、「筋道を立て論理的に問題を解決すること」「現状を分析し、問題点や課題を明らかにすること」「物事を批判的・多面的に考えること」「自分で目標を設定し、技術を身につけようとする」と等構成され、《問題解決能力》と命名した。第2因子は「外国語で聞き話す能力」「外国語で読み書く力」「国際的な視野」で構成され《外国語運用能力と国際的視野》と命名した。第3因子は「社会のルールに従って行動すること」「物事を論理的

表4 学習成果の探索的因子分析

項目	平均値	SD	抽出された因子		
			第1因子	第2因子	第3因子
第1因子 問題解決能力 $\alpha$ 信頼性係数 .841					
y3 筋道を立て論理的に問題を解決すること	2.808	0.609	0.793	-0.084	0.004
y1 現状を分析し、問題点や課題を明らかにすること	2.879	0.614	0.790	0.022	-0.137
y2 物事を批判的・多面的に考えること	2.936	0.592	0.748	0.019	-0.166
y5 自分で目標を設定し、技術を身につけようとする	2.865	0.669	0.712	-0.027	0.049
y4 多様な情報から適切な情報を取捨選択する	2.919	0.545	0.592	-0.030	0.110
y6 進んで新しい知識・技術を身につけようとする	3.020	0.631	0.532	0.016	0.101
第2因子 外国語運用能力と国際的視野 $\alpha$ 信頼性係数 .846					
y8 外国語で聞き話す能力	1.979	0.865	-0.041	1.018	-0.074
y9 外国語で読み、書く力	2.010	0.926	-0.031	0.899	-0.030
y13 国際的な視野	2.306	0.895	0.129	0.492	0.180
第3因子 社会的モラル $\alpha$ 信頼性係数 .734					
y10 社会のルールに従って行動すること	3.239	0.631	-0.162	-0.087	0.717
y11 物事を論理的に判断し行動すること	3.044	0.679	0.122	-0.039	0.715
y12 自分の感情を上手にコントロールすること	3.061	0.699	-0.024	0.050	0.690
y14 社会や文化の多様性を理解し尊重すること	2.806	0.818	0.139	0.150	0.416
固有値			5.024	1.879	1.477
累積寄与率			20.14	43.73	50.72
因子相関行列			1		
			0.355	1	
			0.56	0.352	1

最尤法 プロマックス回転後の因子パターン行列

に判断し行動すること」等4項目から構成されており、《関係形成能力》と命名した。クロンバックα信頼係数は、《問題解決能力》.841、《外国語運用能力と国際的視野》.846、《関係形成能力》.734であった。本研究の対象となった大学生は、社会的モラル得点、問題解決得点が高く、外国語運用能力と国際的視野得点が低い傾向にあった。

5. 看護学生の自己教育力 (表5)

自己教育力尺度40項目について、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子を構成するのにふさわしい項目を採用するために、因子負荷量4.0以上を基準として項目選択を行った。その結果28項目が残った。この時の累積寄与率は33.3%であった。第1因子、《成長発展への志向》は「s2.自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい」「s6.これからもよい仕事をして、多くの人に認められたい」「s1.将来、他の人から尊敬される人間になりたい」「s5.自分がやり始めたことは最後までやり遂げたい」「s3.たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」「s4.自分でなければやれないことをやってみよう」「s7.これから専門的な資格や学位を取りたい」

「s1.将来、他の人から尊敬される人間になりたい」「s5.自分がやり始めたことは最後までやり遂げたい」等7項目で構成された。第2因子《学習の技能と基盤》は「s25.考えていることを筋道立てて書いたり、伝えたりできる」「s26.自己評価するときには、自分の目標を照らして行っている」「s27.自分に必要な文献や記録を分類整理しておく習慣がある」「s23.他の人の話を聞いたり本を読むとき、時々内容を振り返りまとめてみる習慣がある」等7項目で構成された。第3因子《自己の対象化と統制》は「s9.ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い」「s8.いったい何のために勉強するのだろうかといやになることがある」「s39.何をやっても駄目だと思う」「s40.自分のことを恥ずかしいと思うことがある」など9項目で構成された。第4因子《自信・プライド・安定性》は「s35.今の自分に満足している」「s34.生まれ変わるとしたら、やはり今の自分に生まれ変わりたい」等5項目であった。

表5. 自己教育力の探索的因子分析結果

項目	抽出された因子			
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子 成長発展への志向 α信頼性係数 .869				
s2.自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい	.853	.021	.047	-.180
s6.これからもよい仕事をして、多くの人に認められたい	.752	.043	-.072	-.016
s1.将来、他の人から尊敬される人間になりたい	.750	-.006	.012	-.001
s5.自分がやり始めたことは、最後までやり遂げたい	.711	-.044	.098	.049
s3.たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	.696	-.038	.089	.083
s4.自分でなければやれないことをやってみよう	.689	.010	-.030	.013
s7.これから専門的な資格や学位を取りたい	.503	-.025	-.015	.067
第2因子 学習の技能と基盤 α信頼性係数 .831				
s25.考えていることを筋道立てて書いたり、伝えたりできる	-.031	.764	.096	.038
s26.自己評価するときには、自分の目標を照らして行っている	.063	.757	.040	.049
s27.自分に必要な文献や記録を分類整理しておく習慣がある	.018	.680	.006	-.030
s23.他の人の話を聞いたり本を読む時、時々内容を振り返りまとめてみる習慣がある	-.083	.642	.043	.040
s24.考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討議を大切にしている	-.082	.640	.019	.156
s29.取り組みたいことによって、それに合った学習方法や手続きを調べる	.074	.520	-.079	-.012
s22.自分が調べていることについて文献で検索していくことができる	-.023	.495	.000	-.044
第3因子 自己の対象化と統制 α信頼性係数 .748				
s9.ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い	-.006	.171	.574	-.072
s8.いったい何のために勉強するのだろうかといやになることがある	.08	.028	.551	.026
s39.何をやっても駄目だと思う	.034	-.106	.546	.243
s40.自分のことを恥ずかしいと思うことがある	.033	-.173	.514	.197
s38.ときどき自分自身がいやになることがある	-.115	-.101	.512	.191
s10.人の人生は結局偶然のことで決まると思う	.090	-.091	.475	-.042
s18.疲れているときは何もしたくない	-.105	.147	.464	-.115
s19.テレビを見てしまって、勉強がやれないことが多い	.024	.133	.456	-.251
s20.ちょっと嫌なことがあると、すぐ不機嫌になる	.097	-.016	.410	-.074
第4因子 自信・プライド・安定性 α信頼性係数 .823				
s35.今の自分に満足している	-.134	.066	-.016	.800
s34.生まれ変わるとしたら、やはり今の自分に生まれたい	-.006	-.083	-.032	.791
s36.自分にもいろいろとりえがあると思う	.076	.090	-.029	.678
s32.今の自分が幸せだと思う	.090	-.041	.001	.575
s33.自分のやることに自信を持っている方だと思う	.170	.135	.078	.517
固有値	6.8	3.7	2.7	2.4
累積寄与率	15.6	22.3	28.2	33.3
因子相関行列				
1. 成長発展への志向	1			
2. 学習の技能と基盤	0.413	1		
3. 自己の対象化と統制	-0.106	-0.106	1	
4. 自信・プライド・安定性	0.28	0.322	0.123	1
最尤法 プロマックス回転後の因子パターン行列				

表6 各変数間の相関関係の分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
	基礎ゼミ																		
	自己教育力																		
	学習意欲																		
	学習成果																		
1	1																		
2	.597**	1																	
3	.455**	.519**	1																
4	.521**	.567**	.718**	1															
5	.486**	.460**	.605**	.633**	1														
6	.399**	.314**	.312**	.294**	.475**	1													
7	.462**	.430**	.396**	.332**	.529**	.464**	1												
8	.211**	.294**	.207**	.292**	.203**	.190**	.194**	1											
9	.181**	.217**	.189**	.268**	.236**	.055	.205**	.623**	1										
10	.231**	.250**	.180**	.230**	.246**	.223**	.258**	.504**	.291**	1									
11	.002	.004	.068	.137*	.202**	-0.019	.113	.329**	.342**	.322**	1								
12	.225**	.270**	.251**	.312**	.148**	.129*	.133*	.681**	.288**	.186**	.340**	1							
13	.097	.212**	.093	.174*	.179**	.086	.158**	.530**	.319**	.229**	.362**	.241**	1						
14	.113	.121*	.062	.066	.140*	.131*	.190**	.407**	.386**	.246**	.307**	.169**	.425**	1					
15	.113	.210**	.133*	.248**	.187**	.078	.141*	.471**	.230**	.191**	.352**	.297**	.621**	.356**	1				
16	.247**	.243**	.271**	.289**	.364**	.205**	.267**	.533**	.405**	.513**	.121*	.284**	.575**	.321**	.417**	1			
17	.201**	.246**	.169**	.259**	.239**	.133*	.128*	.310**	.184**	.313**	.010	.283**	.314**	.092	.342**	.314**	1		
18	.151**	.243**	.263**	.270**	.332**	.207**	.247**	.427**	.344**	.425**	.017	.291**	.301**	.309**	.299**	.463**	.361**	1	

\*p<.05 \*\*p<.01

尺度全体 (28 項目) および下位尺度ごとのクロンバックの  $\alpha$  信頼性係数を算出した結果、その値は尺度全体で .818、下位尺度別では第 1 因子《成長発展への志向》は .869、第 2 因子《学習の技能と基盤》.831、第 3 因子《自己の対象化と統制》.748、第 4 因子《自信・プライド・安定性》は .823 となっており、いずれも高い値を示していた。

## 6. 各変数間の相関関係の分析 (表 6)

基礎ゼミと自己教育力、学習意欲、学習成果の相関係数の分析を行いその結果を表 6 に示した。表 6 より多くの変数間に有意な正の相関係数が示された ( $p < .05$ ) ( $p < .01$ )。自己教育力の相関係数について、学習意欲との間に  $0.4 \leq r < 0.7$  のやや強い相関を示したのは、自発的学習、勤勉的受講態度、積極的主張と学習成果の課題解決能力、社会的モラルであった。成長発達への志向と  $0.4 \leq r < 0.7$  以上の相関を示したのは学習成果の課題解決能力と学修技能の基盤であった。ゆえに自己教育力には学習意欲と学習成果との間に正の相

関があるといえる。基礎ゼミは、基礎ゼミの間で  $0.4 \leq r < 0.7$  の相関は見られるが、他の項目との強い相関は見られなかった。

## 7. 看護学生の自己教育力と基礎ゼミ・学習意欲・学習成果との関連 (表 7)

看護学生の学習意欲と学習成果と自己教育力の関連性を重回帰分析により検討した。結果 (表 7)、自己教育力得点に対して有意な正の関連性を示した変数は、学習意欲の中の自発的学習 (標準化推定値 0.185,  $p < .004$ )、勤勉的受講態度 (標準化推定値 0.157,  $p < .002$ )、学習成果の問題解決能力 (標準化推定値 0.248,  $p < .001$ ) 関係形成能力 (標準化推定値 0.15,  $p < .005$ ) であった。基礎ゼミは自己教育力との関連は見られなかった。なお、投入したすべての独立変数の自己教育力得点に対する説明率は 42.5% であった。

表 7 学習意欲・学習成果・基礎ゼミと自己教育力との関連 (重回帰分析)

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	$\beta$	標準誤差			
(定数)	25.42	3.914		6.494	0
学習意欲					
自発的学習	0.546	0.183	0.192	2.993	0.003
勤勉的受講態度	0.459	0.151	0.154	3.042	0.003
積極的主張	0.339	0.197	0.101	1.717	0.087
学習成果					
問題解決能力	0.653	0.181	0.226	3.602	0.001
外国語運用能力と国際的視野	0.199	0.195	0.051	1.019	0.309
関係形成能力	0.583	0.23	0.135	2.531	0.012
基礎ゼミ	0.207	0.115	0.087	1.802	0.073

従属変数: 自己教育力  
調整済み  $R^2 = .425$

## 考 察

今回、看護学生が基礎ゼミを受講することで大学教育全般に対する動機づけとなり、学習意欲と学習成果に影響を及ぼし、自己教育力に影響を与えていることが明らかになった。そこで、看護学生にどのような学習機会を与え、学生はその学習機会に対しどのように取り組んでいるかという視点と、看護学生に求められる能力と自己教育力との関連について考察したい。

### 1. 基礎ゼミの学習評価

基礎ゼミの学習評価は、「基礎ゼミで大学生活 (健

康管理・心の健康・学習方法) などの学びは役立っている」「基礎ゼミで学んだプレゼンテーションの方法がわかり活かしている」「基礎ゼミで学んだグループワークを活かしている」などの評価が高かった。文科省<sup>12)</sup>によるとプレゼンテーションやグループワーク等口頭発表の技法や学習のための基礎的技能の育成に関するプログラムや、学問や大学教育全般に対する動機づけの為のプログラム、レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラム、図書館の利用・文献検索の方法を身につけるためのプログラムなどの実施率が高く、ノートテイキングに関するプログラムは低い結果と報告している。佐藤は教養ゼミ



で「ノートのとり方」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」について評価アンケートを実施したが、「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」の評価は高く、「ノートのとり方」についての評価は低く、「ノートのとり方についてはこれまでの学習の習慣が確立されているため、改めて指導されるということに違和感を覚えた学生がいたようだ」との報告<sup>12-13)</sup>があるが、B大学の評価も同様であった。

## 2. 自己教育力と基礎ゼミ、学習意欲、学習成果との関連

基礎ゼミの評価と学習意欲と学習成果が自己教育力にどのような影響を与えているか重回帰分析の結果、基礎ゼミは直接、自己教育力との関連は見られなかった。自己教育力と関連が見られたのは学習意欲の自発的学習と勤勉的受講態度に有意な関連がみられ、学習成果については問題解決能力と関係形成能力に有意な関連が見られた。このことは、基礎ゼミは直接、自己教育力と関連するのではなく、基礎ゼミにより学習の方法を理解することにより、学習意欲、学習成果が上がり、自己教育力を高める効果があるのではないかと思われる。岡田<sup>9)</sup>は、勤勉的受講態度はGPAに対して強い正の影響を与えており、「国際的視野」以外の成長感に影響を与えると報告しているが、本研究ではGPAは行っていないが、基礎ゼミにより学習意欲と学習成果が上がる事が確認できた。

また、学生がどのような授業を経験するかによって学習意欲や学習成果にも影響を与えることが推測されるため、教員は授業の方法等に一層の工夫が必要である。特に本研究では外国語運用能力・国際的視野の学習成果が低いことが示された。道廣らは、自己教育力は、大学生生活の満足度と学習意欲との関連が大きいことを明らかにしており<sup>7)</sup>学習に積極的に取り組むためには整った環境が必要<sup>7)</sup>であり、学習の雰囲気・学習を応援してくれる人がいるという状況に身を置くことが効果的である<sup>14)</sup>。また、溝上<sup>14)</sup>は成長する学生像を、授業に出席しつつ授業外学習や読書も行う、さらには遊びや対人的な活動にも多くの時間を費やす、言い換えれば「よく遊び、よく学ぶ」活動性の高い学生像を指摘し、授業に直接関連のない活動が授業での学習や技能獲得に影響を及ぼしていること、翻って授業でなされることだけで学生は知識や技能を獲得しているわけではないという解釈の可能性を示唆している。看護系大学では、予習・復習・レポート・課題等の授業外学習を前提として授業が進められているため、「よく学

ぶ」ことはあてはまるが、「よく遊ぶ」ことは難しい環境であるといえる。しかしその中で、アルバイトをしている学生が多く、アルバイトをしている学生の方がしていない学生よりもコミュニケーション能力が高いことも指摘されている<sup>15)</sup>。また、看護系大学では、ほとんどの学生が看護職をめざし、将来の見通しが明瞭であり日常生活や行動を自己管理するキャリア教育の様相を示しているといえる。

## 3. 看護学生に求められる能力と自己教育力との関連

梶田<sup>16)</sup>は自己教育力の構成要素として4つの柱を紹介している。それは、「Ⅰ. 成長発展への志向」とその志向性に沿って自分自身を前進させていく力の「Ⅱ. 自己の対象化と統制」と、その前進の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学力の「Ⅲ. 学習の技能と基盤」、および安定した土台の上に乗っての前進を可能にする心理的基盤となる「Ⅳ. 自信・プライド・安定性」の4側面を挙げている。自己教育力の構成要素である成長発展への志向は、看護師に必要な能力である問題解決能力、現状を分析し問題点や課題を明らかにするなど、課題を批判的・多面的に考えるクリティカルシンキングやアセスメント能力など看護師に必要な能力や、物事を論理的に判断し社会のルールに従う倫理性や自分の感情をコントロールできる関係形成能力を習得するため熱心に取り組んでいる様相が見られた。成長発展への志向性に沿って自分自身を前進させていく力である自己の対象化と統制に対しては、自分の意志で継続的に勉強したり、計画性や授業に対して主体的に学習する等の様相が見られた。そしてその前進の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学力である学習の技能と基盤では、課題解決能力、関係形成能力、積極的主張、自発的学習、基礎ゼミとの関連があった。つまり看護実践を行うため必要な専門科目、各領域の看護方法論等を積極的かつ自発的に学んでいることがうかがわれた。

## まとめと今後の課題

1. 学生の基礎ゼミの評価は、グループワーク、プレゼンテーション、レポートの書き方等の評価が高く、ノートテイキングは、評価が低かった。ノートテイキングは大学に入るまで経験があり、いまさらという気持ちが強いことが推測された。
2. 基礎ゼミと学生の学習意欲・学習成果との関連は高い。学習意欲の中では、勤勉的授業態度が最も

高い。

学習成果では、問題解決能力・関係形成能力が高く、外国語運用能力・国際的視野が低かった。

4. 学生の自己教育力は成長発展への志向が大きく、そのための学習の方法等を学ぶという得点が高かった。
5. 大学生活での基礎ゼミが学習意欲、学習成果を高め、その結果、自己教育力を高める傾向にあった。本研究での結果は一部の大学生を対象にした結果であり一般化できない。今後はさらに多くのデータを収集し、いろいろな角度から検討すると同時に、学生の大学生活をもっと多面的に調査し、学生の成長を明らかにし、教育上の工夫と改善等を明らかにしていくことが今後の課題である。

## 謝 辞

調査にご協力いただいた兵庫大学の学生の皆様に感謝の意を表します。

## 引用文献

- 1) 看護学教育のあり方に関する検討会。看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標。看護学教育のあり方に関する報告書。2004, 1-3.
- 2) 「期待される看護専門職像」。大学基準協会。1994.
- 3) 中央教育審議会答申 {大学の質の保証にかかる新たなシステムの構築について (答申)} 中央教育審議会。2002.
- 4) 中央教育審議会。{学士課程教育の構築に向けて} 答申。2008, 35.
- 5) 古志めぐみ、青木紀久代、矢野由佳子。保育者養成短期大学における学校生活に関する満足度の推移とその関連要因、お茶の水女子大学教育機構紀要 (高等教育と学生支援)。2013, 3, 21-9.
- 6) 森田裕司。大学中途退学者のアイデンティティ形成に関する研究。広島経済大学研究論集。1996, 19(1), 71-98.
- 7) 道廣睦子、小林廣美、森崎由佳、明石智子。看護学生の大学に対する満足度が学習意欲と自己教育力に及ぼす影響。日本看護学会—看護教育—抄録集。2014, 160.
- 8) 岡田有司、鳥居朋子、宮浦崇。大学生における学習スタイルの違いと学習成果。立命館高等教育研究。2005, 11, 167-82.
- 9) 岡田有司、鳥居朋子。私立大学における大学生の学習成果の規定要因。立命館高等教育研究。2001, 17, 15-26.
- 10) 西村千代子、奥野茂代。看護婦の自己教育力。日本赤十字幹部看護婦研修所紀要。1995, 11, 22-39.
- 11) 山本嘉一郎、小野寺孝義。共分散構造分析と解析事例。ナカニシヤ出版。2002, 16-7.
- 12) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室。{大学における教育内容等の改革状況について (平成 20 年度)}. 2010.
- 13) 佐藤慶太。「教養ゼミナール」から「大学入門ゼミ」へ香川大学教育研究。2012, 9, 2-40.
- 14) 淵上慎一。「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討、—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—。京都大学高等教育研究。2009, 15, 107-18.
- 15) 道廣睦子、藤田佳子、浅井美穂。看護大学生の自己教育力に影響する要因～ローカスオブコントロール、ストレス耐性、高校時代の委員会活動～、宇部フロンティア大学看護学ジャーナル。2008, 1, No.1.
- 16) 梶田叡一。自己教育力とは何か基本的な 4 側面。七視点について、自己教育を考える (北尾倫彦編)。図書文化社。1987, 19-27.